一

跡部が初めて手塚のテニスを見たのは、中学一年の秋だ。

とは言え、既に春の大会でも、その名前自体はちらほらとは耳にしていた。向日や宍戸も「手塚ってヤツ、出ないのかな」などと話していたからだ。彼はジュニアの世界では結構名の知れた選手だったらしい。それを聞いて、多少は骨のある奴なのだろうかと、跡部も対戦する機会を内心楽しみにしていたのだが、結局、夏には手塚と言う男と対戦するどころか、その試合を見ることも叶わなかった。その大会自体に出場していなかったのだ。聞けば、彼の通う青学と言う所は、一年生は夏の大会が終わるまで試合に出させてもらえないと言う話だった。それを聞いて跡部は自分達の先輩のことを思い出しつつ、どこの学校も下らないなと呆れた。だが、それと同時に、その程度の制約で試合に出させてもらえないのなら、その程度の奴なんだろうとも思った。

その考えが全くの誤りだったと、秋には思い知ったのだが。

秋の新人戦、都大会でそれを見るまで、跡部は正直なところ「手塚」と言う名前をすっかり忘れていた。いや、もしかしたらどこかで名前を耳にする機会くらいあったのかもしれないが、殆ど意識をすることがなかった。当時彼の頭の中を専ら占めていたのは、立海の三強の存在だったのだ。それもそのはず、夏の関東大会では彼らに早々に打ち負かされ

てしまっていた。その相手が自分と同じ一年と知って少なからずプライドを傷つけられたりもしたが、それ以上に闘争心を刺激された。そして全国制覇を成し遂げた彼らにリベンジすることが目標となっていたのだ。

「弱過ぎて負ける気しないぜ！」

「とか言って、油断してんじゃねぇぞ」

二回戦の後、相手に圧勝だった向日の冗談交じりの台詞に、跡部が同じく冗談交じりに釘を刺す。春の大会こそ出場しなかったものの、今では十分レギュラーの座を狙える立場の向日。しかし、つい相手を甘く見て、取れる試合を逃してしまうと言うことも少なくない。それは向日自身も自覚していることで「分かってるよ」と口を尖らせた。

この大会に跡部の出番はない。不在の監督代わりをしたり、今のように、出場する選手に発破をかけたり。先の向日の台詞ではないが、跡部もざっと見た限り、脅威となりうるチームはなさそうだった。

問題はこの後の関東だろ。

夏の雪辱を思い出し、この先にまみえるだろう彼らを思う。もちろんあの三人もこの大会に出ることはないが、同じ立海の他の選手はどいつも侮れないと感じていた。

「なぁ、あのセーラー服、可愛ええと思わん？」

密かな闘志を燃やす跡部に、横から暢気な声。いつもと代わり映えのしない内容に跡部

は眉間に皺を寄せてため息を吐き出す。初めて学校のテニスコートで会って打ち合った時、まさかこんな男だとは思わなかった。いや、こう言う所を除けば、今もやはり「できる」男なのだ。こう言う所を除けば。跡部は後ろを振り返り、ジロリと睨みつける。が、当の本人である忍足は、そんな部長の視線になど全く気付かぬ様子で、コート脇の自販機の方を見ていた。

「ほら、あの制服」

「あぁ？」

台詞とは裏腹な忍足の大真面目な顔つきに、思わず跡部はその指差す先へと視線を移してしまう。二人のやり取りは大概こんなものだった。しようもない忍足の話に呆れながらも、跡部がつい反応を返してしまう。それを分かっているからこそ、忍足の方もそう言う話題をふって遊んでしまうのだが。

「あれ、青春学園言うトコの制服らしいで。可愛えぇと思わん？」

自販機の前にしゃがみ込んでいるのは、なるほど、セーラー服を来た女子生徒だった。その服装よりも、首を傾げているような下を覗き込んでいるような、その彼女の奇妙な行動の方に意識が行ってしまった跡部は、眉間の皺を深くする。コインでも落としたのか？

「パンツ、見えそうで見えへんなぁ」

「……てめぇは変態か」

「いや、若い男の普通の反応やろ？」

「制服じゃなくて、気になってんのはそこかよ」
「乙女のパンツが白か黒かは、大きな問題やで？」
もう何も言う気が起きず、跡部は黙ったまま寄りかかっていたフェンスから身を起こす。
「あれ、どこ行くんだよ、跡部？」
何も言わずその場を離れる跡部に、周囲の者は不思議そうな顔。忍足一人意味深げに笑みを浮かべていたが、背中を向けていた跡部はそれを知るはずもなく。
大股で彼女の方へと近づいて行き、そのすぐ後ろで足を止める。彼女の上に大きな影を作ったけれど、全く気付かないようで、彼女は「あれ？」とか「ううん？」とか言いながら相も変わらず首を傾げていた。取り出し口の透明なプラスチックの箇所をパタパタと小さく揺らしてみたりもしている。その様子を見て、どうやらコインを機械の下に落とした訳ではなく、お金を入れてボタンを押したけれどジュースが出て来ない、と言ったところか、と予想が付いた。
「――どうした」
そのまま自販機を蹴ってもよかったのだが、何となく、下でしゃがみ込んでいる彼女を振り返らせたい衝動に駆られて、跡部は腕組して仁王立ちのまま、そう問いかけた。すると一瞬彼女の肩がビクリと動く。後ろに立った跡部をジュースを買いたい人間だと思ったのかもしれない。そのままの姿勢で「ごめんなさい」と短く言った。
「ボタンを押したはずなんだけど、ジュースが出て来なくって」